

北海道の外来種リスト

— 北海道ブルーリスト 2004 —

平成16年3月

北 海 道

目 次

1 外来種リストを作成する背景と目的	—————	1
2 外来種リストの選定について	—————	2
(1) 選定の体制及び経過	—————	2
ア 検討体制	—————	2
イ 協力体制	—————	3
ウ 検討の経過	—————	3
(2) 選定の考え方と方法	—————	4
3 本道における外来種の実態（選定結果）	—————	6
(1) 概要	—————	6
(2) 各分類群毎のリスト	—————	7
(3) 選定種の解説	—————	3 3

1 外来種リストを作成する背景と目的

近年、野生生物が本来の移動能力を超えて、国外又は国内の他地域から人為によって意図的・非意図的に導入された種が地域固有の生物相や生態系にとって大きな脅威となっている問題、いわゆる「外来種問題」がクローズアップされている。

地球上に存在する生物は約3000万種ともいわれているが、私たち人類の生存は、この生物多様性の上に成り立っているものであり、外来種によって地域固有の生物多様性が損なわれることは、人類の生存基盤が脅かされるということである。そして現在、外来種によって様々な影響が生じているのである。

このため、世界的にも外来種への対策は急務とされており、1992年にブラジルのリオデジャネイロで開催された国連環境開発会議（地球サミット）において採択された「生物の多様性に関する条約」（2002年3月現在の締約国数：183カ国）では、締約国は、「生態系、生息地若しくは種を脅かす外来種の導入を防止し又はそのような外来種を制御し若しくは撲滅すること」と定められている。

我が国でも、ハブ等の天敵として導入されたジャワマンゲースによるアマミノクロウサギなどの捕食（奄美大島）や、野生化したタイワンザルとニホンザルとの交雑（和歌山県）などの外来種による種々の問題を踏まえ、2002年3月に地球環境保全に関する関係閣僚会議で決定された「新・生物多様性国家戦略」において、外来種問題が生物多様性の危機の一つとして掲げられた。そして2003年1月に「移入種対策に関する措置の在り方について」が中央環境審議会に諮問され、同年12月に答申されたところであり、現在、新たな法整備に向けた作業が進められている。

本道においては、ペットとして飼われ捨てられたアライグマが道央圏を中心に生息域を拡大しており、アオサギのコロニーを消滅させたり、農作物等の被害をもたらしている。近年、国内希少野生動植物種であるシマフクロウの生息地への出没も新たに確認され、生態系への影響が強く懸念されている。また、釣りの対象として人気のあるブラックバスが放流され、道南の湖沼や道央のダム湖などで発見されたり、植物でも、ブタクサが花粉症の原因植物とされているなど、外来種は本道でも大きな問題となっている。

このようなことから、「北海道の外来種リスト」（北海道ブルーリスト2004）を作成し、種毎に導入された経緯や生態学的特性、その影響などを取りまとめ、本道における外来種の実態を把握し、対策の基礎資料とすることとした。

なお、これまで「外来種」と「移入種」という用語が同様の意味で使用されていたが、今後は、国の方針に準じ、「外来種」を用いることとした。

ブルーリストとは

希少野生生物のリストが「レッドリスト」とされていることを踏まえて、ブルー（青色）とレッド（赤色）を対照的に捉え、外来種のリストを「ブルーリスト」と命名した。

2 外来種リストの選定について

(1) 選定の体制及び経過

ア 検討体制

北海道ブルーリストの作成にあたっては、2002年10月に「北海道移入種検討委員会」を設置するとともに、各分類群ごとに専門部会を設け、2003年度にかけて（約1年半）検討を行った。

同委員会及び各専門部会の構成メンバーは次のとおりである。

<北海道移入種検討委員会：委員（学識経験者）>

（50音順・敬称略）

氏名	所属など（検討当時）	担当	備考
阿部 永	元北海道大学教授	哺乳類	座長
五十嵐 博	北海道野生植物研究所所長	植物	
池田 透	北海道大学大学院文学研究科助教授	哺乳類	
帰山 雅秀	北海道東海大学大学院理工学研究科教授	魚類	
久万田 敏夫	元北海道大学教授	昆虫	
佐々木 均	酪農学園大学短期大学部教授	昆虫	2003.4～
中林 成広	北海道両棲爬虫類研究所所長	両生・爬虫類	
藤巻 裕蔵	帯広畜産大学名誉教授	鳥類	
吉澤 和徳	北海道大学大学院農学研究科助手	昆虫	

<北海道移入種検討委員会：庁内委員（道の研究職員等）>

（50音順・敬称略）

氏名	所属など（検討当時）	担当
青山 智哉	水産孵化場 資源管理部資源管理科研究職員	魚類
梅木 賢俊	環境科学研究センター 自然環境部主任研究員	鳥類
越智 弘明	道南農業試験場 研究部主任研究員	植物
川井 唯史	原子力環境センター 水産研究科研究職員	甲殻類
車田 利夫	環境科学研究センター 自然環境部自然環境保全科研究職員	哺乳類
栞原 康裕	網走水産試験場 資源増殖部栽培技術科長	軟体動物
古原 洋	中央農業試験場 企画情報室研究職員	植物
高田 雅之	環境科学研究センター 企画総務部環境GIS科長	情報処理
内藤 一明	水産孵化場 養殖技術部育種遺伝科長	魚類
堀 繁久	開拓記念館 学芸員	昆虫
宮木 雅美	環境科学研究センター 自然環境部主任研究員兼植物環境科長	植物

イ 協力体制

北海道ブルーリストの検討・作成にあたっては、前段の各委員に加えて、次の専門家の御協力をいただいた。

<御協力いただいた方々>

(50音順・敬称略)

氏名	所属など(検討当時)	担当
岩崎 暁生	北海道病害虫防除所 予察課長	昆虫
浦和 茂彦	独立行政法人さけ・ます資源管理センター 研究調査課 遺伝資源研究室長	魚類
澤田 嘉昭	北海道畜産試験場 環境草地部 主任研究員	植物
鳥倉 英徳	北海道中央農業試験場 クリーン農業部長 (兼)北海道病害虫防除所長	昆虫
原 秀穂	北海道林業試験場 森林保護部病虫科長	昆虫
松田 まゆみ	日本蜘蛛学会評議員	蜘蛛

ウ 検討の経過

北海道ブルーリストの検討・作成にあたっては、2002年度に設置した「北海道移入種検討委員会」において、検討に関する基本的事項等が整理された。

さらに、各分類群ごとに専門部会を設け、2002年度にリストアップを行い、2003年度に種毎のデータ等の整理が行われた。

区分	分掌	2002年度	2003年度	
北海道移入種検討委員会	全体(基本的事項等)	2002.10.24(第1回)	2004.3.26(第2回)	
各 専 門 部 会	哺乳類専門部会	哺乳類 2002.12.18(第1回) 2003.3.26(第2回)	2003.8.29(第3回) 2004.2.16(第4回)	
	鳥類専門部会	鳥類 2002.12.11(第1回) 2003.3.17(第2回)	2003.8.19(第3回) 2004.2.2(第4回)	
	両生・爬虫類専門部会	両生類・爬虫類 2002.12.12(第1回) 2003.3.27(第2回)	2003.8.21(第3回) 2004.2.17(第4回)	
	魚類専門部会	魚類・甲殻類・軟体動物 (魚類以外は2003年度～)	2002.11.25(第1回) 2003.3.4(第2回)	2003.8.27(第3回) 2004.2.20(第4回)
	昆虫専門部会	昆虫 2002.11.27(第1回) 2003.3.20(第2回)	2003.8.14(第3回) 2003.11.7(第4回) 2004.2.12(第5回)	
	植物専門部会	植物 2002.12.13(第1回) 2003.2.28(第2回)	2003.8.22(第3回) 2004.2.18(第4回)	

(2) 選定の考え方と方法

北海道は、気候的には温帯から亜寒帯への移行帯に属し、周囲は豊かな海に囲まれており、その生物相は、本州以南とは異なる自然性豊かな北方らしい特徴を示している。

このようなことから、北海道ブルーリストに掲載（選定）する種については、次に掲げる4つの視点から検討を行った。

< 4つの視点 >

本道に導入されているか。

本道に定着できるか。（越冬の可能性など）

本道に定着しているか。

本道への影響等が報告されている、あるいは懸念されるか。

上記視点による種の選定のためのふり分けを、次表のとおりとし、同表中の「カテゴリー区分」のA、B、C、D、E、h及びKを選定することとした。

なお、「導入」とは、野生生物の本来の移動能力を超えて、人為によって意図的・非意図的に移動した（された）ことを指し、「導入の時期」については、貿易や物流がそれまでに比べ飛躍的に増大したのは明治時代以降であることなどの背景を踏まえ、原則として明治時代以降に本道に導入された生物種を外来種と捉えることとした。

ただし、動物は、実験・動物園利用など封じ込め下での導入を除くこととし、ペット販売など、不特定多数の者が入手できるような形態は「導入」とした。なお、ペットショップ等で販売されている種については、本リスト作成時に実施した札幌市内でのペットショップへの立入調査等において販売が確認された種を検討の対象とすることとした。

また、植物は、農地・林地・園地や家庭菜園、花壇・宅地の庭などで栽培するための導入は除くこととした。

「影響」については、次に掲げる7つの項目を例として示す。

上位捕食者としての影響

植生などへの影響

競合・駆逐の可能性

交雑による遺伝的攪乱

在来生物への病気・寄生虫の媒介

農林水産業などへの影響

人の健康への影響

表 対象生物の選定の考え方

視点	視点	視点	視点	カテゴリー区分
本道に導入(1)されているか : 導入されている : 不明またははっきりしない x : 導入されていない	本道に定着できるか(越冬の可能性など) : 定着できる(またはそのおそれがある) x : 定着できない	本道に定着しているか : 定着している : 不明またははっきりしない x : 定着していない	本道への影響(2)は : 影響等が報告されている あるいは懸念されている : 上記以外	
				A
				B
				C
				D
		x		E
				F
	x	x		G
		(3)		H
				H うち 注意種 h (4)
		x		
				I
	x			J
(昆虫のみ) 導入されている 「室内昆虫」である(5)				K

(1) 「導入」とは

野生生物本来の移動能力を超えて、人為によって意図的・非意図的に移動した(された)ことを指し、導入の時期については、原則として明治時代以降に本道に導入された生物種を外来種として捉える。

(2) 「影響」の例

- ・ 上位捕食者としての影響
- ・ 植生などへの影響
- ・ 競合、駆逐の可能性
- ・ 交雑による遺伝的攪乱
- ・ 在来生物への病気、寄生虫の媒介
- ・ 農林水産業などへの影響
- ・ 人の健康への影響

(3)

この欄は、在来種である可能性があることにより、視点 を「 」とした場合に適用する。

(4) 「注意種」とは

導入される可能性が高く、導入されると定着し影響が懸念される等、特に注意が必要と考えられるもの

(5)

貯穀害虫などはA~Eなどに区分しにくいいため、「室内害虫」としカテゴリー区分を「K」とする。

3 本道における外来種リスト（選定結果）

（１）概要

北海道ブルーリストの作成にあたり、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類（淡水魚、汽水魚、通し回遊魚）、昆虫、昆虫以外の無脊椎動物及び植物の各分類群毎に検討した結果、全部で806種の生物が選定された。

分類群毎に見ると、哺乳類が25種、鳥類が8種、爬虫類が7種、両生類が16種、魚類が35種、昆虫が89種、昆虫以外の無脊椎動物が28種、植物が598種となっている。

原産地を国外・国内別に見ると、国外が633種、国内が101種、不明が72種となっており、国外から導入されたものが8割近くを占めている。なお、原産地（鳥類の場合は繁殖地）が国外である場合は「国外外来種」、国内である場合は「国内外来種」、国外と国内にまたがる場合は「国内外来種」、不明の場合は「不明」と区分した。

カテゴリー区分別に見ると、Aが504種、Bが183種、Cが37種、Dが10種、Eが21種、hが30種、Kが21種となっており、Aが最も多くなっている。

なお、外来種の生息実態については不明な部分も多いため、新たな知見の収集・調査に努めるなどして、今後とも随時リスト（種の解説の記載内容を含む）の見直し等を図ることとする。

＜北海道ブルーリストに選定された生物数一覧＞

分類群	種数	内 訳									
		原産地の区分			カテゴリー区分						
		国外	国内	不明	A	B	C	D	E	h	K
哺乳類	25	18	7	-	12	1	1	1	7	3	
鳥類	8	4	4	-	4	-	4	-	-	-	
爬虫類	7	2	5	-	1	-	3	-	-	3	
両生類	16	1	15	-	5	-	-	-	-	11	
魚類	35	23	12	-	14	9	3	7	1	1	
昆虫	89	40	25	24	43	2	16	-	2	5	21
昆虫以外の無脊椎動物	28	26	2	-	17	-	4	-	1	6	
植物	598	519	31	48	408	171	6	2	10	1	
合計	806	633	101	72	504	183	37	10	21	30	21

(2) 各分類群毎のリスト

ア 哺乳類

(ア) 国外外来種(18種)

目名	科名	種名(亜種名:*)	カテゴリー区分	備考
ウサギ	ウサギ	カイウサギ	A	
ネズミ	リス	シマリス(チョウセンシマリス)	C	
		アメリカモモンガ	E	
		タイリクモモンガ	E	
		オオアメリカモモンガ	E	
		プレーリードッグの一種	B	
		キタリス	D	
		ハイイロリス	h	
	ネズミ	ドブネズミ	A	
	クマネズミ	A		
	ハツカネズミ	A		
ネコ	アライグマ	アライグマ	A	
	イタチ	ミンク	A	
		フェレット	E	
ジャコウネコ	ハクビシン	A		
フクロネズミ	オポッサム	オポッサムの一種	E	
	クスクス	フクロギツネの一種	E	
	フクロモモンガ	フクロモモンガの一種	E	

(イ) 国内外来種(7種)

目名	科名	種名(亜種名:*)	カテゴリー区分	備考
ネコ	イヌ	イヌ	A	
	イタチ	テン	A	
		ニホンイタチ	A	
	ネコ	ネコ	A	
ウシ	イノシシ	イノシシまたはイノブタ	A	
モグラ	トガリネズミ	ニホンジネズミ	h	
コウモリ	ヒナコウモリ	イエコウモリ	h	

(*)亜種が問題となっている場合は、カッコ内に亜種名を記載
 ・種名が特定できないものについては、「 の一種」と記載しております。

<エゾタヌキとエゾシカの道内導入>

哺乳類では、道内導入として、タヌキ(エゾタヌキ)の本島から奥尻島への導入、ニホンジカ(エゾシカ)の本島から洞爺湖中島への導入があり、それぞれ島の生態系等へ影響を与えている。

イ 鳥類

(ア) 国外外来種 (4種)

目名	科名	種名(亜種名:*)	カテゴリー区分	備考
カモ	カモ	コブハクチョウ	A	
キジ	キジ	コジュケイ(コジュケイ)	C	
		キジ(コウライキジ)	A	
ハト	ハト	カワラバトまたはドバト	A	

(イ) 国内外来種 (4種)

目名	科名	種名(亜種名:*)	カテゴリー区分	備考
キジ	キジ	ヤマドリ(ヤマドリ)	C	
		ヤマドリ(ウスアカヤマドリ)	C	
カモ	カモ	アイガモ	A	
スズメ	カラス	カササギ(カササギ)	C	

ウ 爬虫類

(ア) 国外外来種 (2種)

目名	科名	種名(亜種名:*)	カテゴリー区分	備考
カメ	ヌマガメ	アカミミガメ(ミシシッピアカミミガメ)	A	
	カミツキガメ	カミツキガメ	C	

(イ) 国内外来種 (5種)

目名	科名	種名(亜種名:*)	カテゴリー区分	備考
カメ	ヌマガメ	クサガメ	C	
		ニホンイシガメ	C	
	ヌマガメ	ニホンスッポン	h	
有鱗	ナミヘビ	ヒバカリ(ヒバカリ)	h	
		ヤマカガシ(ヤマカガシ)	h	

(*) 亜種が問題となっている場合は、カッコ内に亜種名を記載
 ・種名が特定できないものについては、「の一種」と記載しております。

工 両生類

(ア) 国外外来種 (1種)

目 名	科 名	種名 (亜種名 : *)	カテゴリー 区 分	備 考
無尾	アカガエル	ウシガエル	A	

(イ) 国内外来種 (15種)

目 名	科 名	種名 (亜種名 : *)	カテゴリー 区 分	備 考
有尾	サンショウウオ	トウホクサンショウウオ	h	
		クロサンショウウオ	h	
		ハコネサンショウウオ	h	
	イモリ	アカハライモリ	h	
無尾	ヒキガエル	ニホンヒキガエル (アズマヒキガエル)	A	
	アカガエル	ニホンアカガエル	h	
		トノサマガエル	A	
		ヤマアカガエル	h	
		ダルマガエル (ナゴヤダルマガエル)	h	
		ダルマガエル (トウキョウダルマガエル)	A	
		ツチガエル	A	
		タゴガエル (タゴガエル)	h	
	アオガエル	カジカガエル	h	
		モリアオガエル	h	
		シュレーゲルアオガエル	h	

() 亜種が問題となっている場合は、カッコ内に亜種名を記載
 ・種名が特定できないものについては、「」の一種」と記載しております。

オ 魚類

(ア) 国外外来種 (23種)

目名	科名	種名(亜種名:*)	カテゴリー区分	備考
ガー	ガー	ロングノーズ・ガー	D	
		スポッテッド・ガー	D	
ウナギ	ウナギ	ヨーロッパウナギ	D	
コイ	コイ	タイリクバラタナゴ	A	
		ソウギョ	E	
		アオウオ	D	
		キンギョ	A	
カワカマス	カワカマス	ノーザンパイク	D	
サケ	サケ	ブラントラウト	A	
		ニジマス	A	
		カワマス	A	
		マスノスケ	h	
		ギンザケ	C	
		シナノユキマス	D	
		コレゴヌス・ペレ	D	
カダヤシ	カダヤシ	グッピー	B	
		コクチモーリー	B	
スズキ	サンフィッシュ	ブルーギル	A	
		オオクチバス	C	
		コクチバス	C	
	カワスズメ	カワスズメ	B	
		ナイルティラピア	B	
タイワンドジョウ	カムルチー	A		

(イ) 国内外来種 (12種)

目名	科名	種名(亜種名:*)	カテゴリー区分	備考
コイ	ドジョウ	ドジョウ	B	
	コイ	ゲンゴロウブナ	A	
		コイ	A	
		タモロコ	A	
		オイカワ	B	
		モツゴ	A	
		シナイモツゴ	B	
		アブラハヤ	B	
		キンブナ	A	
ナマズ	ナマズ	ナマズ	A	
サケ	サケ	サクラマス(アマゴ)	A	
ダツ	メダカ	メダカ	B	

(*) 亜種が問題となっている場合は、カッコ内に亜種名を記載
 ・種名が特定できないものについては、「の一種」と記載しております。

力 昆虫

(ア) 国外外来種(40種)

目名	科名	種名(亜種名:*)	カテゴリー 区分	備考
りんじ 鱗翅	ヒトリガ	アメリカシロヒトリ	A	
	シロチョウ	オオモンシロチョウ	A	
	セセリチョウ	カラフトセセリ	A	
	メイガ	ニカメイガ	A	
	ハマキガ	ボケヒメシンクイまたはスモモヒメシンクイ	A	
	キバガ	バクガ	A	
	ヒロズコガ	イガ	K	
まうち 双翅	ショウジョウバエ	オナジショウジョウバエ	A	
	ハモグリバエ	マメハモグリバエ	C	
		カーネーションハモグリバエ	C	
		アシグロハモグリバエ	C	
	ハナアブ	スイセンハナアブ	A	
	ヒツジバエ	ヒツジバエ	A	
	ヒフバエ	ウシバエ	h	
	クロバエ	ホホアカクロバエ	A	
まくし 膜翅	ミツバチ	セイヨウオオマルハナバチ	A	
	タマバチ	クリタマバチ	A	
	ツヤコバチ	ワタムシヤドリコバチ	C	
	カタビロコバチ	クローバータネコバチ	C	
	ハバチ	オウトウナメクジハバチ	C	
じょうし 鞘翅	ゾウムシ	アカウキクサゾウムシ	A	
		イネミズゾウムシ	A	
		オオタコゾウムシ	C	
		キンケクチプトゾウムシ	A	
		ケチビコフキゾウムシ	A	
		サビチビコフキゾウムシ	A	
	ゴミムシ	コルリアトキリゴミムシ	A	
	コガネムシ	アトラスオオカブトムシ	C	
タイワンカブトムシ		h		
はんし 半翅	アブラムシ	リンゴワタムシ	A	
		ブドウネアブラムシ	C	
	カタカイガラムシ	イチイカタカイガラムシ	A	
	コナジラミ	イチゴコナジラミ	C	
		オンシツコナジラミ	A	
	マルカイガラムシ	ナシマルカイガラムシ	C	
ワタフキカイガラムシ	イセリアカイガラムシ	C		
まうち 総翅	アザミウマ	グラジオラスアザミウマ	C	
		チャノキイロアザミウマ	C	
		ミカンキイロアザミウマ	C	
ちやくし 直翅	コオロギ	ヨーロッパイエコオロギ	C	

(イ) 国内外来種(25種)

目名	科名	種名(亜種名:*)	カテゴリー 区分	備考
りんし 鱗翅	ハマキガ	カラマツイトヒキハマキ	A	
		カラマツヒメハマキ	A	
		カラマツチャイロヒメハマキ	B	
		カラマツミキモグリガ	B	
	ツツミノガ	カラマツツツミノガ	A	
	メイガ	カシノシマメイガ	A	
		ノシメマダラメイガ(ノシメコクガ)	A	
せうし 双翅	ハナバエ	カラマツタネバエ	A	
まくし 膜翅	ミツバチ	オオマルハナバチ(オオマルハナバチ)	E	
		コマルハナバチ(コマルハナバチ)	E	
	ヒラタハバチ	カラマツヒラタハバチ	A	
		ニホンカラマツヒラタハバチ	A	
	ハバチ	カラマツキハラハバチ	A	
		カラマツハラアカハバチ	A	
		ミスジヒメカラマツハバチ	A	
じょうし 鞘翅	オサムシ	アオオサムシ	A	
	コガネムシ	カブトムシ	A	
	クワガタムシ	オオクワガタ *本州産	h	
	ホタル	ヘイケボタル *本州産	h	
		ゲンジボタル	h	
はんし 半翅	カサアブラムシ	カラマツカサアブラムシ	A	
	アブラムシ	カラマツオオアブラムシ	A	
		カラマツイボオオアブラムシ	A	
		カラマツミキオオアブラムシ	A	
		カラマツチビオオアブラムシ	A	

(ウ) 不明 (24種)

目名	科名	種名(亜種名:*)	カテゴリー 区分	備考
りんし 鱗翅	メイガ	スジコナマダラメイガ	A	
		スジマダラメイガ	A	
		コメノシマメイガ	A	
	ハマキガ	ナシヒメシンクイ	A	
しょうし 鞘翅	オサゾウムシ	ココクゾウムシ	K	
	ハムシ	アズキマメゾウムシ	K	
		インゲンマメゾウムシ	K	
		エンドウゾウムシ	K	
	ゴミムシダマシ	コメノゴミムシダマシ	K	
	ケシキスイ	クリイロデオキスイ	K	
	カッコウムシ	アカクビホシカムシ	K	
	ナガシンクイムシ	ケプトヒラタキクイムシ	K	
		チビタケナガシンクイ	K	
		ナラヒラタキクイムシ	K	
ヒラタキクイムシ		K		
チャタテムシ	コナチャタテ	カツブシチャタテ	K	
もうし 網翅	ゴキブリ	ウルシゴキブリ	K	
		クロゴキブリ	K	
		コワモンゴキブリ	K	
		トビイロゴキブリ	K	
		ワモンゴキブリ	K	
		チャバネゴキブリ	チャバネゴキブリ	K
	ヨウランゴキブリ	K		
もうび 総尾	シミ	セイヨウシミ	K	

(*) 亜種が問題となっている場合は、カッコ内に亜種名を記載
 ・種名が特定できないものについては、「 の一種」と記載しております。

キ 昆虫以外の無脊椎動物（甲殻類、軟体動物など）

（ア）国外外来種（26種）

目名	科名	種名（亜種名：*）	カテゴリー 区分	備考
無柄 十脚	フジツボ	キタアメリカフジツボ	A	
	ザリガニ	ウチダザリガニ	A	
	アメリカザリガニ	アメリカザリガニ	A	
原始紐舌 盤足	リンゴガイ	スクミリンゴガイ	C	
	ミズツボ	コモチカワツボ	h	
	カリバガサガイ	シマメノウフネガイ	A	
基眼	モノアラガイ	ヒメモノアラガイ	A	
		コシタカヒメモノアラガイ	A	
		ハブタエモノアラガイ	h	
	サカマキガイ	サカマキガイ	A	
	ヒラマキガイ	インドヒラマキガイ	A	
真有肺	オカチョウジガイ	トクサオカチョウジガイ	C	
		ホソオカチョウジガイ	C	
	コハクガイ	コハクガイ	A	
		ウスグチベッコウ	A	
	コウラナメクジ	コウラナメクジ	A	
		チャコウラナメクジ	A	
	ノハラナメクジ	ノハラナメクジ	A	
	オナジマイマイ	オナジマイマイ	A	
イガイ	イガイ	ムラサキイガイ	A	
		コウロエンカワヒバリガイ	h	
		カワヒバリガイ	h	
		淡水産イガイの一種	E	
マルスダレガイ	シジミガイ	シジミガイの一種	C	
	マルスダレガイ	ホンビノスガイ	h	
	カワホトトギスガイ	イガイダマシ	h	

（イ）国内外来種（2種）

目名	科名	種名（亜種名：*）	カテゴリー 区分	備考
原始紐舌	タニシ	ヒメタニシ	A	
真有肺	オナジマイマイ	ウスカワマイマイ	A	

(*) 亜種が問題となっている場合は、カッコ内に亜種名を記載
 ・種名が特定できないものについては、「 の一種」と記載しております。

ク 植物

(ア) 国外外来種 (519種)

科名	種名	異名	カテゴリー区分	備考
ヤナギ	ウラジロハコヤナギ	ギンドロ	A	
	カロライナボブラ	カロリナボブラ	A	
	カイリョウボブラ	イタリアボブラ、エウロアメリカボブラ	A	
	セイヨウハコヤナギ	ボブラ、クロボブラ	A	
	シダレヤナギ		A	
	コリヤナギ		A	
	ウンリュウヤナギ		A	
ニレ	ノニレ	マンシュウニレ	A	
クワ	アサ	タイマ	A	
タデ	シャクチリソバ	ヒマラヤソバ、シュッコソバ	A	
	ダットンソバ	ニガソバ	B	
	ソバ		B	
	ソバカズラ		A	
	オオツルイタドリ		A	
	ツルタデ	ツルイタドリ	A	
	ツルドクダミ	カシュウ	A	
	ハイミチヤナギ	コゴメチヤナギ	A	
	オオケタデ	オオベニタデ	B	
	ヒメスイバ		A	
	ヌマダイオウ		B	
	アレチギシギシ		B	
	ナガバギシギシ	チヂミスイバ	A	
	ミソダイオウ		B	
	エゾノギシギシ	ヒロハギシギシ	A	
ヤマゴボウ	アメリカヤマゴボウ	ヨウシュヤマゴボウ、インクベリー	A	
	ヤマゴボウ		A	
オシロイバナ	オシロイバナ	ユウゲショウ	B	
ザクロソウ	クルマバザクロソウ		B	
スベリヒユ	マキバナヌマハコベ		A	
ナデシコ	ムギセンノウ	ムギナデシコ、ムギナセンノウ	B	
	セイヨウミミナグサ	エダウチミミナグサ、カラフトミミナグサ	B	
	オランダミミナグサ	アオミミナグサ	A	
	タイリンミミナグサ	セラステイウム	B	
	ノハラナデシコ		B	
	ヒゲナデシコ	アメリカナデシコ、ビジョナデシコ	B	

科名	種名	異名	カテゴリー区分	備考
ナデシコ (* 続き)	セキチク	カラナデシコ	B	
	ヒメナデシコ	オトメナデシコ	B	
	ヌカイトナデシコ		B	
	アメリカセンノウ	ヤグルマセンノウ	B	
	フランネルソウ	スイセンノウ	B	
	アライドツメクサ	アライドツメクサ、トヨハラツメクサ	A	
	サボンソウ	シャボンソウ	A	
	シバツメクサ		B	
	マツヨイセンノウ	ヒロハノマンテマ、アメリカピランジ	A	
	ムシトリナデシコ	コマチソウ、ハエトリナデシコ	A	
	コムギセンノウ	ウメナデシコ	B	
	オオシラタマソウ		A	
	フタマタマンテマ	ホザキマンテマ	A	
	アケボノセンノウ		A	
	シロバナマンテマ		B	
	ツキミセンノウ		A	
	サクラマンテマ	フクロナデシコ、オオマンテマ	B	
	シラタマソウ		A	
	ノハラツメクサ		A	
	ウスベニツメクサ		A	
	カラフトホソバハコベ	カラフトホソバツメクサ、ホソバハコベ	A	
アワユキハコベ		D		
ドウカンソウ		B		
アカザ	ホコガタアカザ	アレチハマアカザ	A	
	<i>Atriplex nitens Schkuhr.</i>		B	
	シロザ	シロアカザ	A	
	ケアリタソウ		A	
	ゴウシュウアリタソウ		B	
	コアカザ		A	
	ウラジロアカザ		A	
	ウスバアカザ	オオバアカザ、オオアカザ	A	
	ミナトアカザ	ノコギリアカザ	A	
	ヒロハヒメハマアカザ		B	
	ホウキギ	ホウキグサ	A	
	イソホウキギ	イソホオキギ	A	
	ハリヒジキ	オニヒジキ	B	
	ヒユ	ヒメシロビユ	シロビユ	A
ヒユ			A	
ホソアオゲイトウ			A	

科名	種名	異名	カテゴリー区分	備考
ヒユ (* 続き)	アオゲイトウ	アカアオビユ	A	
	ホナガイヌビユ	アオビユ	A	
キンボウゲ	シュウメイギク	キブネギク	B	
	セイヨウオダマキ		B	
	ヒメタガラシ		B	
	セイヨウキンボウゲ	アクリスキンボウゲ	B	
	タマキンボウゲ	セイヨウキンボウゲ、カブラキンボウゲ	B	
スイレン	ハゴロモモ	フサジュンサイ	A	
オトギリソウ	オオカナダオトギリ		A	
	セイヨウオトギリ	コゴメバオトギリ	A	
ケシ	ハナビシソウ	カリフォルニア・ポピー	A	
	カラクサケマン		D	
	ナガミヒナゲシ		B	
	ヒナゲシ	グビジンソウ、ノハラヒナゲシ	A	
	アツミゲシ	セチゲルムゲシ	B	
アブラナ	アレチナズナ		B	
	シロイヌナズナ		A	
	セイヨウワサビ	ワサビダイコン、ウマダイコン	A	
	ハルザキヤマガラシ	セイヨウヤマガラシ、フユガラシ	A	
	ウスユキナズナ		B	
	カラシナ	セイヨウカラシナ	A	
	セイヨウアブラナ	チョウセンナタネ	A	
	クロガラシ		A	
	オニハマダイコン		A	
	アマナズナ	タマナズナ、マルミノアマナズナ	A	
	ヒメアマナズナ	ヒメタマナズナ	A	
	ナガミノアマナズナ		A	
	ホソミナズナ	オオナズナ	A	
	ミチタネツケバナ		A	
	コタネツケバナ	ヒメタネツケバナ	A	
	ニオイアラセイトウ	ウォールフラワー	E	
	ツノミナズナ		A	
	ナタネハタザオ	マルバガラシ、コバンガラシ	A	
	カラクサガラシ	カラクサニガナ、カラクサナズナ、 インチンナズナ	A	
	クジラグサ		A	
	ロボウガラシ	カラクサハタザオ	A	
	ヒメナズナ		E	
	オハツキガラシ	ホソガラシ	A	

科名	種名	異名	カテゴリー区分	備考
アブラナ (* 続き)	エゾスズシロ	キタミハタザオ	A	
	エゾスズシロモドキ		E	
	ハナスズシロ	ハナダイコン、セイヨウハナダイコン	A	
	キレハマメグンバイナズナ	ミナミグンバイナズナ	B	
	ウロコナズナ		A	
	ヒメグンバイナズナ	コマメグンバイナズナ	A	
	コシミノナズナ		A	
	コショウソウ		B	
	マメグンバイナズナ	コウベナズナ、セイヨウグンバイナズナ	A	
	ニワナズナ	アリッサム	A	
	ゴウダソウ	ルナリア、ギンセンソウ、コバンソウ	A	
	オランダガラシ	クレソン、ミズガラシ、ミズタガラシ	A	
	タマガラシ	タガラシ、ロスケナタネ、ロスケナズナ	A	
	ショカツサイ	ハナダイコン、シキンソウ、オオアラセイトウ、シキンサイ	A	
	セイヨウノダイコン	キバナダイコン	A	
	ミヤガラシ		A	
	ミミイヌガラシ		B	
	キレハイヌガラシ	ヤチイヌガラシ	A	
	シロガラシ	キクガラシ、キカラシ、キクバガラシ、アメリカカラシナ	A	
	ノハラガラシ	オニイヌガラシ	A	
	ハタザオガラシ		A	
	カキネガラシ	オニナズナ、ケカキネガラシ	A	
	イヌカキネガラシ		A	
グンバイナズナ	グンバイウチワ	A		
ベンケイソウ	ヨーロッパタイトゴメ	オウシュウマンネングサ	B	
	ウスユキマンネングサ	シロガネツツキ、イソコマツ	B	
	ツルマンネングサ		B	
ユキノシタ	フサスグリ	アカスグリ、カーランツ、アカフサスグリ	A	
	マルスグリ	セイヨウスグリ、オオスグリ、ゲースベリー	A	
バラ	オランダイチゴ	セイヨウイチゴ、ストロベリー	A	
	エゾヘビイチゴ	エゾノヘビイチゴ	A	
	ハイキジムシロ		C	
	エゾノミツモトソウ		A	
	タチロウゲ	オオヘビイチゴ、オオロウゲ	A	
	オキジムシロ		B	
	スモモ		A	
	ロザ・グラウカ	ルブリフォリアバラ	C	

科名	種名	異名	カテゴリー区分	備考
バラ (* 続き)	セイヨウヤブイチゴ	ブラックベリー	A	
	イシカリキイチゴ	クロミキイチゴ	A	
	ユキヤナギ		B	
マメ	イタチハギ	クロバナエンジュ、ロシヤハギ	A	
	クマノアシツメクサ	ワタゲツメクサ	A	
	アメリカホドイモ	アメリカホド	A	
	ゲンゲ	レンゲソウ、レンゲ	C	
	ムレスズメ		C	
	エニシダ		A	
	アレチヌスビトハギ		C	
	ガレガ		h	
	ヒロハレンリソウ	ヒロバナレンリソウ、宿根スイートピー	B	
	キバナレンリソウ	セイヨウレンリソウ	B	
	ヤナギバレンリソウ		A	
	シベリアメドハギ		A	
	セイヨウミヤコグサ		A	
	ワタリミヤコグサ		A	
	ネビキミヤコグサ		A	
	キバナハウチワマメ	ノボリフジ	B	
	ルピナス	タヨウハウチワマメ、ノボリフジ、 シュッコルピナス	A	
	コメツブウマゴヤシ		A	
	コウマゴヤシ		B	
	ウマゴヤシ	マゴヤシ、ムマゴヤシ	B	
	ムラサキウマゴヤシ	セイヨウウマゴヤシ、アルファルファ、 ルーサン	A	
	コシナガワハギ		B	
	シロバナシナガワハギ	コゴメハギ	A	
	シナガワハギ	エビラハギ	A	
	ハリエンジュ	ニセアカシア、アカシア、イヌアカシア	A	
	タマザキクサフジ	タマザキフジ、クラウン・ベッチ	A	
	トガリバツメクサ		B	
	シャグマハギ	シャグマツメクサ	A	
	クスダマツメクサ	ホップクローバー、ホップツメクサ、 カラハナツメクサ	A	
	コメツブツメクサ	キバナツメクサ	A	
	テマリツメクサ		A	
	タチオランダゲンゲ	タチツメクサ、アルサイククローバー	A	
	ベニバナツメクサ	ベニバナウマゴヤシ、クリムソンクローバー	B	

科名	種名	異名	カテゴリー区分	備考
マメ (* 続き)	オオバナアカツメクサ	ジグザグクローバー	B	
	ムラサキツメクサ	アカツメクサ、レッドクローバー	A	
	シロツメクサ	オランダウマゴヤシ、オランダゲンゲ、 ホワイトクローバー	A	
	ミツバツメクサ		B	
	イブキノエンドウ	カラスノエンドウ	A	
	ピロードクサフジ	シラゲクサフジ、ヘアリーベッチ	A	
カタバミ	ムラサキカタバミ	キキョウカタバミ	A	
フウロソウ	ジャコウオランダフウロ	ジャコウフクロ	B	
	アメリカフウロ		B	
	オランダフウロ		B	
	ヤワゲフウロ		B	
	チゴフウロ		B	
	ピレネーフウロ		A	
	ヒメフウロ	シオヤキフウロ	A	
アマ	アマ	ヌメゴマ	A	
トウダイグサ	マツバトウダイ	イトスギトウダイ	A	
	コニシキソウ		A	
ニガキ	ニワウルシ	シンジュ	A	
ヒメハギ	ヒロハセネガ		E	
カエデ	ネグンドカエデ	トネリコバナカエデ	A	
ムクロジ	フウセンカズラ		B	
ツリフネソウ	ハナツリフネソウ		A	
	オニツリフネソウ	ダキバツリフネソウ、ロイルツリフネソウ	A	
ブドウ	アメリカツタ		A	
アオイ	イチビ	キリアサ	A	
	タチアオイ		A	
	ギンセンカ	チュウロソウ	A	
	ジャコウアオイ	フウロアオイ	A	
	ゼニバアオイ		A	
	ナガエアオイ	ハイアオイ	B	
	ゼニアオイ		A	
	オカノリ		B	
	アメリカキンゴジカ		E	
スマレ	ニオイスマレ		A	
	ミツデスマレ	キクバスマレ、クワガタスマレ	B	
	アメリカスマレサイシン		B	
	サンシキスマレ	ノハラサンシキスマレ	A	
	フィリゲンジスマレ		B	

科名	種名	異名	カテゴリー区分	備考
ウリ	アレチウリ		A	
	オオスズメウリ	キバナスズメウリ	A	
アカバナ	メマツヨイグサ	アレチマツヨイグサ	A	
	オオマツヨイグサ		A	
	オニマツヨイグサ		B	
	ヒナマツヨイグサ		A	
	ヒルザキツキミソウ		B	
	コマツヨイグサ		B	
	マツヨイグサ		B	
アリノトウグサ	オオフサモ	ヌマフサモ	A	
セリ	イワミツバ		A	
	イヌニンジン	フルズバセリ	A	
	ドクニンジン	ヘムロック	A	
	コエンドロ	コリアンダー	C	
	ノラニンジン		A	
サクラソウ	アカバナルリハコベ	ベニバナルリハコベ	A	
	サカコザクラ		B	
	コバンコナスビ	ヨウシュコナスビ	A	
	セイヨウユキワリソウ		B	
モクセイ	レンギョウ		A	
キョウチクトウ	ツルニチニチソウ	ピンカ・マヨール	A	
	ヒメツルニチニチソウ	ピンカ・ミノール	A	
アカネ	トゲナシムグラ	カスミムグラ	A	
	トゲナシヤエムグラ		A	
	ヒナソウ	トキワナズナ	A	
	ハナヤエムグラ	アカバナムグラ	B	
ハナシノブ	ホソバヤナギハナシノブ	ホソバコルロミア	A	
	クサキョウチクトウ	オイランソウ	A	
	シバザクラ	ハナツメクサ、モス・フロックス	A	
ヒルガオ	コヒルガオ		A	
	セイヨウヒルガオ	ヒメヒルガオ	A	
	アマダオシ		B	
	ツメクサダオシ		B	
	アメリカネナシカズラ	コバノアメリカネナシカズラ	A	
	アメリカアサガオ		A	
	マメアサガオ	ヒメアサガオ、ヒラミホシアサガオ	A	
ムラサキ	アラゲムラサキ	キバナムラサキ	A	
	ワルタビラコ		A	
	トゲムラサキ		A	

科名	種名	異名	カテゴリー区分	備考
ムラサキ (* 続き)	シベナガムラサキ		A	
	ノムラサキ		A	
	イヌムラサキ		B	
	ノハラムラサキ	ノハラワスレナグサ	A	
	ワスレナグサ	ワスレナグサ、シンワスレナグサ	A	
	ハマワスレナグサ		A	
	ヒナムラサキ		A	
	オオハリソウ	ラフコンフリー	A	
	ヒレハリソウ	コンフリー	A	
クマツヅラ	ヤナギハナガサ	タチパーベナ、サンジャクパーベナ	B	
	アレチハナガサ		B	
シソ	セイヨウキランソウ	ツルジュウニヒトエ、セイヨウジュウニヒトエ	B	
	チシマオドリコソウ	イタチジソ	A	
	コバノカキドオシ	セイヨウカキドオシ	A	
	ホトケノザ		B	
	モミジバヒメオドリコソウ		A	
	ヒメオドリコソウ		A	
	モミジバキセウタ	ヨウシュメハジキ	A	
	セイヨウヤマハッカ	レモンパーム	A	
	ヨウシュハッカ	カナダハッカ?	A	
	アメリカハッカ		A	
	ナガバハッカ	ケハッカ	A	
	コショウハッカ	ペパーミント、セイヨウハッカ	A	
	オランダハッカ	スペアミント、ミドリハッカ	A	
	イヌハッカ	キャニトップ、チクマハッカ	A	
	シソ	アカジソ	A	
	ハナトラノオ	カクトラノオ	A	
	セイヨウウツボグサ		A	
	イヌヒメコヅチ		A	
	チョロギ		A	
	オトメイヌゴマ		E	
ナス	チョウセンアサガオ	マンダラゲ	A	
	クコ		A	
	オオセンナリ		A	
	ツクバネアサガオ	ベチュニア	B	
	ホオズキ		A	
	ピロードホオズキ	アメリカホオズキ	A	
	アメリカイヌホオズキ		A	
	ワルナスビ	オニナスビ	A	

科名	種名	異名	カテゴリー区分	備考
ナス (* 続き)	トマトダマシ		B	
	ケイヌホオズキ		A	
	ハリナスビ		A	
	ハゴロモイヌホオズキ		A	
フジウツギ	チチフフジウツギ	フサフジウツギ	B	
ゴマノハグサ	キンギョソウ		A	
	ウキアゼナ		B	
	ツタバウンラン	ツタカラクサ	A	
	キツネノテブクロ	ジキタリス	A	
	ムラサキウンラン	ヒメキンギョソウ	A	
	マツバウンラン		B	
	キバナウンラン		B	
	ヤナギウンラン		B	
	ホソバウンラン	ホザキウンラン、セイヨウウンラン	A	
	アメリカアゼナ		A	
	タケトアゼナ		A	
	ニシキミゾホオズキ		B	
	アレチキンギョソウ		B	
	フクロウンラン	ウンランモドキ	B	
	ウスムラサキツリガネヤナギ	ヒメツリガネヤナギ	E	
	モウズイカ	ニワタバコ	A	
	ムラサキモウズイカ		B	
	ピロ - ドモウズイカ	アイヌタバコ、ニワタバコ	A	
	タチイヌノフグリ		A	
	カラフトヒヨクソウ		A	
	フラサバソウ	ツタバイヌノフグリ	A	
	アレチイヌノフグリ		A	
	オオイヌノフグリ		A	
	コテングクワガタ		A	
ノウゼンカズラ	キリ		A	
オオバコ	ヘラオオバコ		A	
	セイヨウオオバコ	オニオオバコ	A	
	ツボミオオバコ	タチオオバコ	B	
キキョウ	ハタザオキキョウ	カンバナラ	A	
	ロベリアソウ	セイヨウミゾカクシ	A	
キク	オオバナノコギリソウ	カラノコギリソウ?	B	
	キバナノコギリソウ	アルテミス	B	
	セイヨウノコギリソウ	ヤロー	A	
	ブタクサ		A	

科名	種名	異名	カテゴリー区分	備考
キク (* 続き)	ブタクサモドキ		A	
	オオブタクサ	クワモドキ	A	
	エゾノチチコグサ		B	
	キゾメカミツレ	アレチカミツレ	B	
	カミツレモドキ	シロカミツレ	A	
	ゴボウ	ノラゴボウ	A	
	ニガヨモギ		B	
	クソニンジン	ホソバニンジン	B	
	カワラニンジン	ノニンジン	B	
	ネバリノギク	アメリカシオン	A	
	ユウゼンギク	シノノメギク、メリケンコンギク	A	
	キダチコンギク		A	
	ホウキギク	アレチシオン、ホウキシオン、八八キギク、 八八キシオン	A	
	ヒナギク	デージー	A	
	アメリカセンダングサ	セイトカタウコギ	A	
	ヤグルマギク	ヤグルマソウ	B	
	ヤグルマアザミ		B	
	クロアザミ		B	
	イガヤグルマギク		B	
	シロバナムシヨケギク	ダルマジョチュウギク、シロムシヨケグサ	B	
	アカバナムシヨケギク	アカムシヨケギク	B	
	フランスギク		A	
	キクニガナ	チコリー	A	
	セイヨウトゲアザミ	カナダアザミ	A	
	アメリカオニアザミ	セイヨウオニアザミ、ヒレオニアザミ、 アメリカヒレアザミ	A	
	アレチノギク	ノジオウギク	A	
	オオアレチノギク		A	
	オオキンケイギク		A	
	ハルシャギク	ジャノメギク、ジャノメソウ、クジャクソウ	A	
	コスモス	オオハルシャギク、アキザクラ	A	
	アレチニガナ		A	
	ヤネタヒラコ		A	
	エキノブス	ルリタマアザミ	B	
	ダンドボロギク	オオボロギク	A	
	ヒメジョオン	ヤナギバヒメギク	A	
	ヒメムカシヨモギ	ゴイッシングサ、テッドウグサ、 メイジソウ	A	

科名	種名	異名	カテゴリー区分	備考
キク (* 続き)	ハルジオン	ハルジョオン、カンザシバナ	A	
	ヤナギバヒメジョオン		A	
	ヘラバヒメジョオン	ヤナギバヒメジョオン?	A	
	マルバフジバカマ		A	
	テンニンギク		B	
	ハキダメギク		A	
	コゴメギク		B	
	タチチチコグサ	ホソバチチコグサモドキ	B	
	エダウチチチコグサ	タチチチコグサ?	A	
	ヒメチチコグサ	エゾノハハコグサ	A	
	チョウセンシオン	チョウセンヨメナ	A	
	イヌクイモ	チョロギイモ	A	
	クイモ	ブタイモ	A	
	クイモモドキ	ヒメクイモ	B	
	ヒマワリ	ヒグルマ	A	
	コウリントンボボ	エフデギク、エフデタンボボ	A	
	キバナコウリントンボボ	ノハラタンボボ、キバナノコリントンボボ	A	
	ブタナ	タンボボモドキ	A	
	トゲヂシャ	アレチヂシャ、トゲヂシャ	A	
	ナタネタピラコ	カラフトヤブタピラコ	A	
	カミツレ	カモミール、カミルレ	A	
	イヌカミツレ	ウイキョウギク、イヌカミルレ	A	
	コシカギク	オロシャギク	A	
	オオハンゴンソウ		A	
	アラゲハンゴンソウ	キヌガサギク	A	
	ミツバオオハンゴンソウ	オオミツバハンゴンソウ	B	
	ノボロギク		A	
	ツキヌキオグルマ		B	
	セイタカアワダチソウ	ハイザンソウ	A	
	オオアワダチソウ	ヤナギバキリンソウ	A	
	カナダアキノキリンソウ		A	
	イトバアワダチソウ		A	
	アレチノゲシ		A	
	オニノゲシ		A	
	ナツシロギク	コシロギク、ナツノコシロギク	B	
	ヨモギギク	タンジー	A	
	アカミタンボボ	キレハアカミタンボボ	A	
	セイヨウタンボボ		A	
	バラモンギク	キバナムギナデシコ、キバナザキモンジン	B	

科名	種名	異名	カテゴリー区分	備考
キク (* 続き)	フキタンポポ	カントウ	A	
	ハチミツソウ	キンミツソウ、ハネミギク	A	
	イガオナモミ		A	
	オオオナモミ		A	
	トゲオナモミ		A	
	オナモミ		A	
トチカガミ	コカナダモ		A	
ユリ	ラッキョウ	オオニラ	B	
	キバナギョウジャニンニク		E	
	ニンニク		B	
	オランダキジカクシ	アスパラガス、マツバウド	A	
	ユキゲユリ		B	
	ドイツズラン	セイヨウスズラン	B	
	バイモ	アミガサユリ	B	
	ルリムスカリ		B	
	オオアマナ	オオツルボ、オオニソガラム	A	
	シラー	フタバツルボ	B	
ヒガンバナ	スノードロップ	マツユキソウ、ユキノハナ	B	
	スノーフレイク	ハルノマツユキソウ、スズランズイセン、 オオナツユキソウ、オオマツユキソウ、 ナツノユキノハナ	B	
	ヒガンバナ	マンジュシャゲ	B	
	クチベニズイセン		B	
	スイセン		A	
	タマスダレ		A	
	ヤマノイモ	ナガイモ		A
アヤメ	クロッカス	ムラサキサフラン、ハナサフラン	A	
	ドイツアヤメ	ジャーマンアイリス	B	
	キショウブ		A	
	ニワゼキショウ		E	
	ヒトフサニワゼキショウ		A	
	ヒメヒオウギズイセン	モントブレチア	B	
ツククサ	ムラサキツククサ		A	
イネ	ヤギムギ		B	
	ニセコムギダマシ		B	
	コヌカグサ	レッドトップ	A	
	ヒメヌカボ	ベルベットベント	A	
	イトコヌカグサ	ハイランドベント、コモンベント	A	
	クロコヌカグサ	ブラックベント	A	

科名	種名	異名	カテゴリー区分	備考
イネ (* 続き)	ハイコヌカグサ	クリーピングベント	A	
	ヌカススキ		B	
	オオスズメノテッポウ	メドウフォックステール、ヨウシュセトガヤ	A	
	ヒメハルガヤ		B	
	ハルガヤ	スイートバーナルグラス	A	
	ハガワリトボシガラ		B	
	ホソセイヨウヌカボ		B	
	セイヨウヌカボ		B	
	オオカニツリ	トールオートグラス	A	
	カラスムギ	チャヒキ	A	
	ハダカエンバク		B	
	マカラスムギ	オート、オートムギ、エンバク	A	
	オニカラスムギ		B	
	コバンソウ	タワラムギ	B	
	ヤクナガイヌムギ		A	
	イヌムギ	プレーリーグラス	B	
	ムクゲチャヒキ		A	
	コスズメノチャヒキ	イヌムギモドキ、スームズブロームグラス	A	
	ハトノチャヒキ	カメノチャヒキ	B	
	ハマチャヒキ		A	
	ヒバリノチャヒキ	イシカリチャヒキ?	B	
	ヒゲナガスズメノチャヒキ	オオスズメノチャヒキ、オオキツネガヤ	A	
	カラスノチャヒキ		A	
	ノゲイヌムギ	ノゲノムギ	A	
	アレチノチャヒキ	ニセキツネガヤ	B	
	ウマノチャヒキ	ヒゲナガチャヒキ、ヤセチャヒキ	A	
	ヒメクリノイガ		E	
	クシガヤ		B	
	ヒゲガヤ		B	
	カモガヤ	オーチャドグラス	A	
	ハキダメガヤ		B	
	シバムギ	ヒメカモジグサ、クオックグラス	A	
	シナダレスズメガヤ	セイタカカゼクサ、ウイーピンググラス	A	
	コスズメガヤ		A	
	オニウシノケグサ	トールフェスク	A	
	オウシュウトボシガラ		B	
	ヒロハノウシノケグサ	メドウフェスク	A	
	セイヨウコウボウ		B	
	シラゲガヤ	ベルベットグラス、ヨークシャーフォッグ	A	

科名	種名	異名	カテゴリー区分	備考
イネ (* 続き)	ヤバネオオムギ	サナダムギ	B	
	ホソノゲムギ	リスノシッポ	A	
	ムギクサ		B	
	オオムギ	ヨレツオオムギ	B	
	ネズミホソムギ		A	
	ネズミムギ	イタリアンライグラス	A	
	ホソムギ	ベレニアルライグラス、チャヒキムギ、ライグラス	A	
	アマドクムギ		A	
	ボウムギ	トゲシバ、トゲムギ	A	
	ドクムギ		A	
	ハナクサキビ	キヌイトクサキビ	A	
	オオクサキビ		A	
	ニコゲヌカキビ		A	
	クサヨシ	リードカナリーグラス、ホソボクサヨシ	A	
	カナリ - クサヨシ	ヤリクサヨシ、カナリヤクサヨシ、カナリーグラス、カナリーサード	B	
	ヒメカナリークサヨシ		B	
	オオアワガエリ	チモシーグラス、チモシー、キヌイトソウ	A	
	ムカゴイチゴツナギ		A	
	コイチゴツナギ	カナダブルーグラス	A	
	ヌマイチゴツナギ		A	
	ナガハグサ	エゾナガハグサ、ケンタッキーブルーグラス、ヒロハノナガハグサ、ホソバノナガハグサ	A	
	オオズメノカタビラ	ミズイチゴツナギ	A	
	ナギナタガヤ	ネズミノシッポ、シッポガヤ	B	
ガマ	モウコガマ		A	
カヤツリグサ	クシロヤガミスゲ		A	
	アメリカヤガミスゲ		A	
	カタガワヤガミスゲ		A	
	ナガバアメリカミコシガヤ		A	

(イ) 国内外来種(31種)

科名	種名	異名	カテゴリー区分	備考
マツ	カラマツ		A	
	チョウセンゴヨウ	チョウセンマツ	B	
カバノキ	オオバヤシャブシ		A	
タデ	イタドリ		A	
ナデシコ	マツモトセンノウ	マツモト	B	
メギ	バイカイカリソウ		B	
ドクダミ	ドクダミ		A	
ウマノスズク	フタバアオイ	フタバサイシン、カモアオイ	B	
アブラナ	ワサビ		A	
ユキノシタ	ウツギ	ウノハナ	A	
バラ	ヤマブキ		A	
マメ	ニワフジ	イワフジ	B	
	マルバハギ		A	
	ミヤギノハギ		A	
	フジ	ノダフジ	A	
ブドウ	ヤブカラシ	ピンボウカズラ	A	
スイカズラ	ハコネウツギ		A	
キキョウ	ソバナ	マルバシャジン	A	
	ホタルブクロ		A	
キク	ヒメヨモギ		A	
	ヨモギ	カズサヨモギ	A	
	ヤブヨモギ	ブンゴヨモギ	A	
	キクタニギク	アワコガネギク、アブラギク	B	
	ユウガギク		B	
	フキ	キョウブキ	A	
ユリ	ニラ		A	
	クサスギカズラ	テンモンドウ	B	
	ヤマユリ		B	
	ヤブラン		B	
ヒガンバナ	キツネノカミソリ		B	
イネ	アズマネザサ		A	

(ウ) 不明 (48種)

科名	種名	異名	カテゴリー区分	備考
タデ	オオイスタデ		A	
	イスタデ		A	
	イシミカワ		A	
	ミチヤナギ	ニワヤナギ	A	
	ホソバタデ	サツマタデ	B	
	コガネギシギシ	ミゾギシギシ	A	
スベリヒユ	スベリヒユ		A	
ナデシコ	ミミナグサ		A	
	ウシハコベ		A	
	コハコベ	ハコベ	A	
ヒユ	イヌヒユ	ノヒユ	A	
キンボウゲ	オダマキ		B	
	セリバオウレン		B	
アブラナ	イヌナズナ		A	
	ハマダイコン		A	
カタバミ	カタバミ		A	
トウダイグサ	エノキグサ	アミガサソウ	A	
ミツガシワ	アサザ		A	
ナス	ヨウシュチョウセンアサガオ	シロバナチョウセンアサガオ	A	
	イヌホオズキ		A	
ゴマノハグサ	ホザキシオガマ		B	
	ムシクサ		B	
オオバコ	オオバコ		A	
キキョウ	リンドウザキカンパヌラ		A	
キク	エゾノキツネアザミ		A	
	カントウヨメナ		B	
	<i>Leontodon autumnalis L.</i>		B	
	メナモミ		A	
	ハチジョウナ		A	
	ノゲシ		A	
ユリ	ヤブカンゾウ	オニカンゾウ	A	
	オニユリ	テンガイユリ	A	
	コオニユリ	アカヒラトユリ	A	
ヤマノイモ	ヤマノイモ		B	
アヤメ	ハナショウブ		B	
イグサ	クサイ		A	
ツククサ	ツククサ		A	

科名	種名	異名	カテゴリー区分	備考
イネ	スズメノテッポウ		A	
	カズノコグサ	ミノゴメ	A	
	スズメノチャヒキ		A	
	メヒシバ		A	
	アキメヒシバ		A	
	イヌビエ		A	
	オオウシノケグサ	クリーピングフェスク、レッドフェスク	A	
	スズメノカタビラ		A	
	キンエノコロ		A	
	エノコログサ		A	
	コムギ		A	

分類は次によった。

哺乳類	今泉吉典（1988）世界哺乳類和名辞典．平凡社
鳥類	日本鳥類目録編集委員会（2000）日本鳥類目録．日本鳥学会
爬虫類	標準和名制定委員会（2003）爬虫両棲類学会報Vol.2003.No.1．日本爬虫両棲類学会
両生類	標準和名制定委員会（2003）爬虫両棲類学会報Vol.2003.No.1．日本爬虫両棲類学会
魚類	Nelson,J.S.(1994)Fishes of the World,third edition．John Wiley & Sons,Inc 中坊徹次編（1993）日本産魚類検索．東海大学出版会
昆虫	九州大学農学部昆虫学研究室ほか（1989）日本産昆虫総目録．九州大学昆虫学教室
甲殻類	西村三郎編（1995）原色検索日本海岸動物図鑑 []．保育社
軟体動物	奥谷喬司編（2000）日本近海産貝類図鑑．東海大学 Beesley,P.L.et al(1998）Mollusca: The Southern Synthesis.CSIRO Publ
植物	清水建美編（2003）日本の帰化植物．平凡社

(3) 選定種の解説

この項に掲載する量は膨大であるため別冊にすることとし、ここでは、各分類群毎に代表的な例を掲載する。

ア 哺乳類

例：アライグマ

哺乳類 国外外来種

分類	目名	ネコ目
	科名	アライグマ科
	種名(亜種名:)	アライグマ
	学名	Procyon lotor
カテゴリー区分	A B C D E h K	

導入の経緯	原産地	カナダ南部からアメリカ合衆国、中央アメリカにかけて分布
	導入年代	
	初報告	1992(参考文献15)
	全国分布	青森、福島、島根、愛媛、佐賀、鹿児島を除く41都道府県
	道内分布	108市町村(平成15年10月現在)
種の生態学	導入の原因	飼育個体の逃亡・遺棄
	生活史型	一夫多妻型の社会構造で、基本的にはメスが子育てを行う。子は11カ月で性成熟に達し、1歳で66%、2歳以上では96%のメスが妊娠している。
	食性	雑食性であるが、トウモロコシ等の農作物の他に鳥の卵、魚類、甲殻類なども好む。オボチュニスティックな採食傾向があるため、生息地域によっては摂食物が異なる。一般に夏には動物性脂肪を多く接種し、秋には冬に備えて植物性脂肪を蓄える。
	形態	頭胴長42~60%、尾長20~41%、体重6~7kg。顔の黒いマスクと尾の白黒のリングが特徴的。
	繁殖形態	1~2月に交尾期を迎え、約60日の妊娠期間を経て、平均4.1頭の子を出産する。流産などで出産に失敗した場合はもう一度発情を迎え、夏期に出産するものもある。
特性	生息環境	水辺の森林地帯を好むが、湿地から農耕地や市街地まで生息環境は多岐にわたる。
	特記事項	夜行性で木登りが得意。都市の市街地にも侵入。
	影響の種類	上位捕食者としての影響 植生などへの影響 競合・駆逐の可能性 交雑による遺伝的攪乱 在来生物への病気・寄生虫の媒介 農林水産業などへの影響 人の健康への影響 その他
対策	対策	平成6年より狩猟獣に指定。平成10 11年に「アライグマ被害対策検討協議会」、平成11 13年に「アライグマ対策検討委員会」を設置するとともに調査研究を進め、平成15年度より「北海道アライグマ対策基本方針」を定め、アライグマ対策行動計画によって排除をすすめている。また、「北海道動物の愛護及び管理に関する条例」でアライグマを特定移入動物に指定し、新たなアライグマの侵入予防をはかっている。
	特記事項	ニホンザリガニやエゾサンショウウオの捕食、アオサギの営巣妨害などが報告されている。
分配図	有り	無し
写真またはイラスト	有り	無し
備考		
参考文献	9) 安部永ほか(1994)、日本の哺乳類：東海大学出版会 10) 野生生物保護対策検討会移入種問題分科会(2002)、移入種(外来種)への対応方針について 12) 池田透(1998)「移入哺乳類の現状と対策」、遺伝52巻5号37 41頁 13) 自然環境研究センター(1998)野生化哺乳類実態調査報告書 15) 村山美佳(1992)「北海道におけるアライグマの帰化研究」、北海道大学大学院文学研究科修士論文 16) 池田透(1999)「北海道における移入アライグマ問題の経過と課題」、北海道大学文学部紀要 47巻4号149 175頁 17) 池田透(1997)「日本における移入哺乳類の諸相と問題点」、北海道大学文学部紀要 46巻1号195-215頁 18) 池田透(2000)「移入アライグマの管理に向けて」、保全生態学研究5巻2号159-170頁 19) 池田透(2002)「アライグマ」、外来種ハンドブック：他人書館 70頁 20) 池田透(2003)「アライグマ」、外来生物 つれてこられた生き物たち：滋賀県立琵琶湖博物館 64-65頁 21) Makoto Asano et al.(2003)「Growth pattern and seasonal weight changes of the feral raccoon (Procyon lotor) in Hokkaido. Japan.J.Jpn.Vet.Res」50巻4号165-173頁 22) Makoto Asano et al.(2003)「Reproductive Characteristics of the Feral Raccoon (Procyon lotor) in Hokkaido.japan.J.J.Vet.Med.」sci 65巻3号369-372頁 23) 堀繁久・釣場洋平(2001)「移入種アライグマが捕食していた節足動物」、北海道開拓記念館研究紀要 29巻67-76頁 28) 哺乳類保護管理専門委員会(1999)「移入哺乳類への緊急対策に関する大会決議」、哺乳類科学 30巻1号115-129頁	

() 亜種が問題となっている場合は、カッコ内に亜種名を記載
 ・種名が特定できないものについては、「」の一種」と記載しております。

イ 鳥類

例：カワラバトまたはドバト

鳥類 国外外来種

分類	目名	ハト目
	科名	ハト科
	種名(亜種名:*)	カワラバトまたはドバト
	学名	Columba livia
カテゴリー区分	A B C D E h K	
導入の経緯	繁殖地	原種は、イギリス諸島、ヨーロッパ南部、アフリカ北部、中近東、中央アジア、中国西部の温帯、熱帯に分布繁殖1、3、4) 砂漠、半砂漠、岩壁のある海岸に棲む1) 14亜種がある1、4)
	導入年代	道内の移入年代は不明である。日本への移入は、大和・飛鳥時代までさかのぼると考えられている5)
	初報告	
	全国分布	ドバトは、北海道、本州、佐渡、四国、九州、奄美諸島、琉球諸島に分布繁殖3、4)
	道内分布	ドバトは道内全域に分布繁殖
	導入の原因	カワラバトから作り出された家禽が野生化2、3、4、5)
種の生態学的特性	わたり習性	留鳥2、3、4)
	大きさ・色	全長33cm。ドバト羽色には変異が多いが、原種に近いものは全体に灰青色で、後頸は光沢のある緑色と紫色。腰は白い。翼に2本の黒帯があり、尾羽先端も黒い。くちばしは灰褐色、虹彩と足は赤い3)
	繁殖形態	原種は岩壁のくぼみや割れ目に細根などで粗雑な皿形の巣を作り、2卵を産む。主に雌が抱卵。一年に数回繁殖する。1) ドバトは、建築物など人工物に営巣。
	生息環境	ドバトは、平地から山地の農耕地や市街地に生息する2、3、4、) 駅前や公園など人の多いところや給餌が行われているところ、飼料工場周辺、家畜舎周辺に多い2)。
影響	特記事項	
	影響の種類	上位捕食者としての影響
		植生などへの影響
		競合・駆逐の可能性
		交雑による遺伝的攪乱
		在来生物への病気・寄生虫の媒介
		農林水産業などへの影響
		人の健康への影響
その他		
対策		
特記事項	家禽は、世界中に移入されている4)。	
分布図	有り 無し	
写真またはイラスト	有り 無し	
備考		
参考文献	1) 動物大百科第8巻鳥類 .1986.平凡社 2) 藤巻裕蔵.2000.北海道鳥類目録改訂2版.帯広畜産大学野生動物管理理学研究室。 3) 五百沢日丸・山形則男・吉野俊幸.2000.日本の鳥550.山野の鳥.文一総合出版。 4) 日本鳥類目録編集委員会.2000日本鳥類目録改訂第6版.日本鳥学会。 5) 山階鳥類研究所.1979.ドバト害防除に関する基礎的研究.山階鳥類研究所。	

() 亜種が問題となっている場合は、カッコ内に亜種名を記載
 ・種名が特定できないものについては、「 の一種」と記載しております。

ウ 爬虫類

例：アカミミガメ(ミシシippiaアカミミガメ)

爬虫類 国外外来種

分類	目名	カメ目
	科名	ヌマガメ科
	種名(亜種名:*)	アカミミガメ(ミシシippiaアカミミガメ)
	学名	Trachemys scripta elegans
カテゴリー区分		A B C D E h K

導入の経緯	原産地	亜種ミシシippiaアカミミガメはアメリカ合衆国からメキシコ北東部
	導入年代	1950年代後半以降
	初報告	1993年1)
	全国分布	本州、四国、九州、沖縄島、小笠原父島
種内の生態	道内分布	札幌市の道庁の池で繁殖が確認されており、帯広市の緑丘公園池でも成体や幼体が見られる。
	導入の原因	ペットとして飼育していたものが、遺棄されたと推察される。
種内の生態学的特性	生活史型	雑食性で、日中は日光浴していることが多い。
	形態	甲長は12~25cm、幼体は緑色をしており成長につれて黒化していく。目の後ろに赤い斑点がある。
	繁殖形態	4月~7月に、穴を掘って2~22卵を産む。
	生息環境	流れのゆるやかな河川や低地の湖沼に生息する。
影響	影響の種類	上位捕食者としての影響
		植生などへの影響
		競合・駆逐の可能性
		交雑による遺伝的攪乱
		在来生物への病気・寄生虫の媒介
		農林水産業などへの影響
		人の健康への影響
	その他	
対策		
特記事項		
分配図	有り 無し	
写真またはイラスト	有り 無し	
備考	ペットショップでミドリガメとして販売されている。	
参考文献	1) 竹中 健(2002)爬虫類・両生類相とその分析。「生態学からみた北海道」(東正剛ほか編), pp.198-208.北海道大学図書刊行会 2) 安川雄一郎(2002)陸生・ミシシippiaアカミミガメ。「外来種ハンドブック」(日本生態学会編) p97 他人書館 3) 安川雄一郎(1996)陸生・淡水生カメ類「日本動物大百科5両生類・爬虫類・軟骨魚類」(千石正一ほか編) pp56-63 平凡社	

() 亜種が問題となっている場合は、カッコ内に亜種名を記載
・種名が特定できないものについては、「」の一種」と記載しております。

工 両生類

例：トノサマガエル

両 生 類 国 内 外 来 種

分 類	目名	無尾
	科名	アカガエル科
	種名(亜種名:*)	トノサマガエル
	学名	Rana nigromaculata
カテゴリー区分		A B C D E h K

導 入 の 経 緯	原産地	日本、朝鮮、中国、ロシア沿海州の一部
	導入年代	1993年以前
	初報告	1993年1)
	全国分布	本州、四国、九州
	道内分布	北広島市、札幌市
	導入の原因	学校教材として持ち込まれた可能性がある2)。
種 の 生 態	生活史型	主に水田の畦や近くの草むらで生活する。
	形態	体長は38～94mm、背中の中央に明るい縦条がある。
	繁殖形態	水田や湿地の浅い止水で繁殖する。
	生息環境	平地から山ぎわにかけての水田、池などに生息する。
学 的 特 性	特記事項	
影 響	影響の種類	上位捕食者としての影響
		植生などへの影響
		競合・駆逐の可能性
		交雑による遺伝的攪乱
		在来生物への病気・寄生虫の媒介
		農林水産業などへの影響
		人の健康への影響
	その他	
対策		
特記事項		
分配図	有り 無し	
写真またはイラスト	有り 無し	
備考		
参考文献	1) 竹中践(1993)北海道・広島町におけるトノサマガエルの生息状況. 爬虫両棲類学雑誌. 15(2)84 2) 斎藤和範(2002)北海道に持ち込まれたカエル類「外来種ハンドブック」(日本生態学会編)P232他人書館 3) 前田憲男・松井正文(1989)日本カエル図鑑文一総合出版	

() 亜種が問題となっている場合は、カッコ内に亜種名を記載
・種名が特定できないものについては、「 の一種」と記載しております。

オ 魚類

例：オオクチバス

魚 類 国 外 外 来 種

分類	目名	スズキ目
	科名	サンフィッシュ科
	種名(亜種名:*)	オオクチバス
	学名	Micropterus salmoides
	地方名	ブラックバス(混称)
カテゴリー区分	A B C D E h K	

導入の経緯	原産地	ケベック、オンタリオからフロリダ、メキシコにいたる北アメリカ大陸
	導入年代	1999～2000
	初報告	工藤(2002)
	全国分布	全国に広く分布
	道内分布	大沼湖沼群、南幌町
	導入の原因	日本へは1925年に芦ノ湖に導入されたが、1970年代以降遊漁者による放流により分布が拡大した。北海道も遊漁者による放流と見られる。
種の生態学的特性	生活史型	淡水型ではあるが、広塩性で海水でも生活出来る。
	大きさ	全長70cmに達する。
	繁殖形態	産卵期は北アメリカ北部で5～6月、南部で12～4月、日本では5～6月。16～22で産卵する。雄は水底にすりばち状の巣を作り、産卵受精後は雄が卵から稚魚まで保護する
	生息環境	湖沼や河川の下流の流れのゆるやかなところを好む。
特性	特記事項	北海道での自然繁殖は確認されていないが、定着の可能性は十分ある。
影響	影響の種類	上位捕食者としての影響
		植生などへの影響
		競合・駆逐の可能性
		交雑による遺伝的攪乱
		在来生物への病気・寄生虫の媒介
		農林水産業などへの影響
		人の健康への影響
その他		
対策	2003年10月に北海道内水面漁業調整で移殖放流禁止	
特記事項	本種は世界の侵略的外来種ワースト100の1種にあげられており、移入された地域の在来群集の生態系におおきな影響を与えることが知られている。すでに移殖放流禁止とされたので、法の遵守を徹底する。	
分布図	有り 無し	
写真またはイラスト	有り 無し	
分配図		
参考文献	Lee, D.S. et al. 1980. Atlas of North American freshwater fishes. 867p. North Carolina State Museum of Natural History Raleigh. 工藤智2002北海道2001年ブラックバス調査事始 魚と水(38). 7-18 環境省自然環境局生物多様性センター2002生物多様性調査動物分布調査・淡水魚類報告書. 545p 丸山為蔵・藤井一則・木島利通・前田弘也. 1987外国産新魚種の導入経過147p水産庁研究部資源課・水産庁養殖研究所. 東京日本生態学会編2002外来種ハンドブック390p他人書館東京 日本魚類学会自然保護委員会. 川と湖沼の侵略者ブラックバスーその生物学と生態系への影響. 150p恒星社厚生閣東京	

() 亜種が問題となっている場合は、カッコ内に亜種名を記載
・種名が特定できないものについては、「 の一種」と記載しております。

カ 昆虫

例：カブトムシ

昆虫 国内外来種

分類	目名	鞘翅目
	科名	コガネムシ科
	種名(亜種名：*)	カブトムシ
	学名	Allomyrina dichotoma dichotoma
カテゴリー区分	A B C D E h K	

導入の経緯	原産地	日本(本州、四国、九州)
	導入年代	1936年の記録が最も古い。道内への定着は1970年代頃からと考えられる。
	初報告	
	導入の原因	樹木の苗木や堆肥に紛れて導入、放逐、逸出など
種の生態学的特性	生息環境	森林
	食性	幼虫は堆肥や腐葉土、成虫は樹液
	習性	成虫は、他の昆虫を追い払って樹液を独占する傾向が見られる。
	特記事項	主に林業地帯や酪農地帯の堆肥で発生している場合が多い。
影響	影響の種類	上位捕食者としての影響
		植生などへの影響
		競合・駆逐の可能性
		交雑による遺伝的攪乱
		在来生物への病気・寄生虫の媒介
		農林水産業などへの影響
		人の健康への影響
		その他
	対策	
特記事項		
分配図	有り 無し	
写真またはイラスト	有り 無し	
備考		
参考文献	喜田和孝(2003)、知床移入種事情、知床ライブラリー5、知床の昆虫：212-225	

() 亜種が問題となっている場合は、カッコ内に亜種名を記載
 ・種名が特定できないものについては、「 の一種」と記載しております。

キ 昆虫以外の無脊椎動物（甲殻類、軟体動物など）

例：ムラサキイガイ

昆虫以外の無脊椎動物 国外外来種

分類	目名	イガイ目
	科名	イガイ科
	種名(亜種名:*)	ムラサキイガイ
	学名	<i>mytilus galloprovincialis</i>
	地方名	カラスガイ・ヒルカイ
カテゴリー区分	A B C D E h K	

導入の経緯	原産地	ヨーロッパ地中海沿岸
	導入年代	陸奥湾からの報告前後と考えられ、1950年代
	初報告	同定が混乱した期間が長く不明
	全国分布	日本全国に分布
	道内分布	北海道全域の沿岸部に分布
	導入の原因	船底付着による成体、バラスト水による浮遊幼生の侵入。
種の生態学的特性	生活史型	
	大きさ	殻長50mm
	繁殖形態	
特性	生息環境	浅海域の岩礁、人口構造物(船底、湾岸施設)に足糸で付着
	特記事項	
影響	影響の種類	上位捕食者としての影響
		植生などへの影響
		競合・駆逐の可能性
		交雑による遺伝的攪乱
		在来生物への病気・寄生虫の媒介
		農林水産業などへの影響
		人の健康への影響
	その他	
対策	バラスト水の沿岸での排水禁止	
特記事項	国際自然保護連名(IUCN)の定めた「世界の侵略的外来種ワースト100」、外来種ハンドブックの定めた「日本の侵略的外来種ワースト100」両リストに選定されている。	
分配図	有り 無し	
写真またはイラスト	有り 無し	
備考		
参考文献	<ul style="list-style-type: none"> ・ 栗原康裕1993. ムラサキイガイの正体. 北水試だより. 21: 14-18 ・ 栗原康裕2001. 北海道におけるキタノムラサキイガイとムラサキイガイ. 黒装束の侵入者 	

- () 亜種が問題となっている場合は、カッコ内に亜種名を記載
 ・ 種名が特定できないものについては、「 の一種」と記載しております。

ク 植物

例：エゾノギシギシ

植物 国外外来種

分類	科名	タデ科	
	種名	エゾノギシギシ	
	学名	Rumex obtusifoliusL	
	英名	Broadleaf dock	
異名	ヒロハギシギシ		
下位分類名	和名		
	エゾノギシギシ×ナガバギシギシ=ノハラダイオウ	学名	
カテゴリー区分	A B C D E h K		

導入の経緯	原産地	ヨーロッパ	
	導入年代	明治	
	初報告	中井(1909)	
	全国分布	北海道～琉球。暖地には少ない。	
	道内分布	全道に普通	
	導入の原因	作物種子などに混入し、移入？。	
種の生態学的特性	生活型	多年草	
	高さ(m)	50-120cm	
	開花時期	7月	
	生息環境	道端、荒地、畑地、牧草地など	
影響	特記事項	種子の発芽適温は10～25℃、光発芽性、寿命は長い。乳牛に採食され、排泄され、3ヵ月間スラリーに浸漬されても発芽力を失わないものあり。根の再生力は基部から3cm位までで旺盛。地表で凍結した場合は再生力を失うことが多い。	
	影響の種類	植生などへの影響	
		競合・駆逐の可能性	
		交雑による遺伝的攪乱	
		在来生物への病気・寄生虫の媒	
		農林水産業などへの影響	
		人の健康への影響	
対策	畑地では通常の体系除草（実生）と結実前の抜き取り（定着後）、草地では優占すれば更新。		
特記事項	極難防除・重要雑草・草地で最強害。		
分配図	有り	無し	
写真またはイラスト	有り	無し	
備考			
参考文献	五十嵐博(2001)北海道帰化植物便覧.p14. 伊藤浩司・日野間彰・中井秀樹(1994)北海道高等植物目録 .p88. 長田武正(1972)日本帰化植物図鑑.p189.北隆館 長田武正(1976)原色日本帰化植物図鑑.p355.保育社 清水矩宏・森田弘彦・廣田伸七(2001)日本帰化植物写真図鑑.p21.全農協 清水建美 編(2003)日本の帰化植物.p49.平凡社 滝田謙讓(2001)北海道植物図譜.p.184.		

() 亜種が問題となっている場合は、カッコ内に亜種名を記載
・種名が特定できないものについては、「」の一種」と記載しております。

外来種を含め野生生物を捕獲等する場合は、主務官庁の許可が必要な場合があります。

北海道の外来種リスト

- 北海道のブルーリスト2004 -

ホームページアドレス：<http://blueList.hokkaido-ies.go.jp>

問合せ先：北海道環境生活部環境室自然環境課特定生物グループ

電話番号：011-231-4111（内線24-387）

FAX番号：011-232-6790

Eメールアドレス：kansei.shizen1@pref.hokkaido.jp